

のどの違和感

のどの重要な機能の一つである「のみこみ」は、一見単純そうな動きに思えます。しかし実際は、舌が動き、のどが挙上し、食道への入り口が開き、という多くの動作をタイミングよく行っています。このどこのどこが乱れてもうまくのみこむことはできず、複雑な神経のネットワークで制御しています。

このように、のどにはたくさんの神経が通っていますので、どうしても敏感になりがちです。すると、つかえる感じ、何かがある感じ、ガサガサする感じ、などなど、様々な違和感となってあらわれます。耳鼻咽喉科外来には、このようなのどの違和感を抱えて受診される患者様が数多くいらっしゃいます。のどに腫瘍があったり、鼻水がのどにたれこんでいたり(後鼻漏)、胃酸がのどまで逆流していたり(咽喉頭酸逆流症)など、原因がわかることもあります。しかし中には、特に異常が見つからないこともあり、「咽喉頭異常感症」と診断されます。「なんでもない」、「気のせいだ」などと言われてしまうこともあるかもしれません。

異常が指摘できないので、西洋医学では治療に苦慮します。しかし、漢方にはこのようなのどの違和感を改善しうる処方があります。頻用される処方は「半夏厚朴湯」です。この処方、「気剤」とよばれるストレス軽減剤の代表です。咽喉頭異常感症の発現にストレスが関与しているかたは少なからずおり、このような気剤が奏効することがあります。また、半夏厚朴湯は「咽中炙癰」、「梅核気」によく用いたといわれています。「咽中炙癰」は「のどの中に炙った肉がひっかかっている感じ」、「梅核気」は「梅の種(核)がのどにひっかかったような感じ」であり、いずれものどの違和感を表現した言葉です。このように、半夏厚朴湯はのどの違和感に用いやすい処方です。

漢方薬には半夏厚朴湯以外にも多くの気剤があり、半夏厚朴湯以外の処方が奏効することもあります(柴朴湯、香蘇散、加味逍遙散など)。他にも、のどの乾燥から違和感を生じる場合もあり、これには潤す作用を持った漢方薬を用います(麦門冬湯など)。もちろん、後鼻漏や咽喉頭酸逆流症が原因で、西洋治療で効果が不十分な場合にも、漢方薬は役に立ちます。

咽喉頭異常感症の他にも、西洋医学的に異常と認識されない病態は数多くあります。このような場合でも、漢方医学では診断をつけ、治療を行うことが可能です。異常がないといわれ諦めていた症状がありましたら、漢方治療を是非一度お試しいただければと思います。

(1016字)